

蚊遣り火

いよいよ夏の到来、すでに 5 月には北海道で 40℃近い気温の記録とか！今年の夏は今から心配だ。さて、「かや（蚊帳）」と書いても読めない人や何のことだか知らない人も多い。家屋構造や網戸の普及で「蚊よけ」は不要となって久しい。

「蚊遣り火」とは今流に言えば「蚊取り線香」今では世界中で蚊取り線香は使われているそうだが、実は明治 23 年に今でも健在な日本の企業が開発したもの。

時代の変遷に懐かしさを覚えるが、季節に欠くことの出来ない必然のアイテムだ。

「原三溪」

横浜の名園「三溪園」の創立者というだけでなく横浜開港から近代日本の基幹産業としての生糸貿易で財を成した原富太郎の雅号と簡潔に言うしかない。

原三溪の本名は原富太郎、さらに言えば旧姓は青木富太郎で岐阜県岐阜市旧佐波村の庄屋の長男として生まれ 18 才で現在の早稲田大学に学び跡見学園の教職を経て、生糸売込商、原商店、原善三郎の孫娘屋寿子と結婚することにより、原富太郎となる。

原三溪は慶応 4 年（1868）いわば明治元年生まれ、戦争の激しさの増す昭和 14 年（1939）70 才で生涯を閉じるが、明治時代の急成長や西洋化と富国強兵などの政変による「廃仏毀釈」で貴重な文化財や歴史的建造物が亡くなることを憂い、輸送や移築の苦労を伴いながら古来の文化や芸術を擁護すべく私財を投じて買い集めた。その結果、現在の「三溪園」には 10 を数える重要文化財が現存しているが、私邸でもある「三溪園」を私物化すべきではないと「遊覧ご随意」としてに市民に解放し今日に至るわけだ。

関東大震災（大正 12、1923）で焼け野原となつた横浜は国の決定待ちでは国際港の役には立たないとガレキを埋立てた山下公園や現横浜の姿があるのは私利私欲を捨て愛市、無私としての原復興会長の決断実行を誰もが功績として認める。

藤本実也氏が「原三溪翁伝」として生い立ちや人格などを描いた原稿が親族の金庫に半世紀もの長い間眠っていたが 2007 年「原三溪市民研究会」が内海孝氏（東京外語大名誉教授）の指導を受けながら 2 年間に掛けて立派に装填、製本された。

明治維新から 150 年と様々な企画が開催されているが、横浜美術館では 7/13～9/1 の長期に亘り、**原三溪の美術伝説のコレクション展** また、同美術館内のアートギャラリーでは市民団体の**原三溪市民研究会**が 10 年の歩みとして 8/3～9/1 事業家、詩人、絵画、茶人でもあった**三溪像**について 8/10（日）**シンポジウム**を含めた企画展を開催する。成金趣味の昨今[真の偉人とは]を学びたい。

TOPICS

- 1、家庭用 「太陽熱温水器」更改提案 三浦市 5/14 S邸
- 2、業務用 大型浴水循環濾過装置 更改提案
(1) 三浦市 N老人ホーム 5/9 (2) 横浜市 M老人ホーム 5/13
- 3、家庭用 「浴室リフォーム」企画提案 横浜市 A邸 5/23
- 4、業務用 「太陽熱温水システム」 更改提案 三浦市 Y福祉施設 5/27